研究課題　承久の乱関係史料の基礎的研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　長村祥知（京都府京都文化博物館・学芸員）

　所内共同研究者　木下竜馬・藤原重雄・堀川康史

　所外共同研究者　有賀茜(京都府京都文化博物館・学芸員)・梅沢恵（神奈川県立金沢文庫・主任学芸員）・小倉嘉夫（大阪青山歴史文学博物館 ・主任学芸員）・西谷功（泉涌寺宝物館心照殿・学芸員）・貫井裕恵（神奈川県立金沢文庫・学芸員）・山岡瞳（京都府立大学・共同研究員）

研究の概要

（１）課題の概要

　承久の乱とは、承久三年（一二二一）五月、後鳥羽院が鎌倉幕府執権北条義時の追討を命じるも、上洛した鎌倉方武士に京方武士が合戦で敗北し、後鳥羽を含む三人の上皇が遠方に流された事件である。その研究は長く停滞していたが、近年になって研究書や新書が相次いで刊行されるなど、社会の関心も高まりつつある。  
　本研究課題は、この承久の乱に関する史料の原本調査に取り組む。かつて承久の乱研究が停滞していた一因は関連史料が限られていたことにあった。その数少ない史料も、『大日本史料』や『大日本古文書』といった先駆的な翻刻に依拠してきたため、かえって史料の原本に即した研究が十分ではない。承久の乱研究を中核として、今後の関連諸課題の基礎となるための、個々の史料に即した研究資源化を進めたい。  
具体的には、史料所有者・管理者の権利・意向や規程を尊重した上で、史料原本の熟覧調査、カラー写真の撮影、厳密な翻刻文を作成し、その成果を展示・書籍・報告書・論文等を通して広く社会に公開していく。

（２）研究の成果

　本課題の共同研究員の専門分野は、日本中世の政治史・法制史・宗教史・対外交流史・文学史・絵画史や日本近世の文学史・絵画史といった諸分野にまたがる。その強みを活かして、古文書・古記録のみならず、古典籍・古筆切・和歌懐紙・聖教・屏風絵・肖像画・絵巻・古絵図・瓦・彫像・刀剣といった様々な歴史的諸資料の原本・実物の調査を進めた。そして、後鳥羽院と鎌倉幕府、承久の乱について、政治・社会・文化など多角的な視角から検討を加えた。  
主要な成果として、以下の点が挙げられる。  
・従来は翻刻が知られるのみで原本情報が不分明であった「山内家文書」（個人蔵〈山口県文書館〉　＊この表記は同館の指示による）のうち、巻子装となっている古文書30通や系図2巻について、所内共同研究者が撮影した全巻カラー写真と装丁・寸法等の調査知見を公刊した。  
・従来は『大日本史料』に翻刻が分載され、部分写真のみが掲載公刊されている「承久三、四年日次記残闕」（仁和寺蔵）の全巻カラー写真と装丁・寸法等の調査知見を公刊した。  
・美術を専門とする所外共同研究員と共同で調査を進めることで、「熊野本地仏曼荼羅」（聖護院門跡蔵）が鎌倉時代の制作と考えられることや、「曽我物語絵巻」（神奈川県立歴史博物館蔵）と「承久記絵巻」（個人蔵）の制作環境が近いこと等が明らかとなった。  
・1939年に恩賜京都博物館（現京都国立博物館）で展示された後、所在不明となっていた「承久記絵巻」全6巻（個人蔵）を再発見し、主要な部分に解説を加えて展示・図録掲載した。  
・後鳥羽院の文化史上の再評価を試み、大陸由来の新しい宗教の動きに関心を示したことや、後鳥羽撰の『時代不同歌合』が歌仙絵の展開に重要な位置を占めることなど、従来看過されてきた宗教的事蹟や文化史上の意義に注目し、展示や図録を通して一般の方に紹介した。